
競馬の面白さ

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

競馬の面白や

【Zマーク】

N3228E

【作者名】

馬路キレナ

【あらすじ】

競馬の話。ただの賭け事だけじゃ、語りつかせない話題が山ほどある。

(前書き)

実名がチラホラ出ていますが。
だいたいはフィクションです。

競馬というのは実に面白い。

それは、誰もが思い描かなかつた奇跡が起つるからだ。

平成の駿馬オグリキャップ全盛期。

いわゆる平成初期の競馬ブームの時は、こう言つた地方競馬にもスロットライドが当たり、週末となると活気や人気も爆発的にあつた。だが今、強く稼げる人気馬は全て中央競馬に進み、地方出身の馬は見下されて、その成りを潜めている。例えば隔週で行われる開催レースであつても、自分の入れ込んだ競走馬がゲートインする時は普通、観客のざわめきや熱気に包まれて場内の温度が上がるのだが、今やそれも無いに等しい。

昔は…いや『今も』と、言つたほうが良いだろうか。

見渡せば馬と人の波に沸き返る場内には、本当に色んな人が競馬を見に来ていた。

道楽ついでにやれ本命だ穴馬だと大金をつぎ込む金持ちも居れば、明日の銭さえ満足に稼げないのに、浪漫だ何だと理屈をこねて賭け事に狂う貧乏人も居た。だがどんな人でも、入るための整理券を持ち、入場料五百円を払えば、職業身分に差別なく隣に座れた時代だった。古くから地方競馬に出入りしている人は「良い時代だつた」と言つが、これも時代の流れと思えば仕方ないとも考えられる。

競馬場には『ゴンドラ席』と呼ばれる固有スペースもある。広い

スペースを有し、レース場全体を見下ろせる少々値の張る指定席だが、本当の競馬ファンはゴンドラ席を率先してとろうとしない。やはり賭け事というのは、勝負の気風を肌で感じれる距離、馬蹄の音が身近に聞こえる距離で、興奮して身を乗り出す人の肩と擦れ合いうぐらいでないと面白くない。外野にある予想屋（どの馬が良いか詳細を乗せた小冊子を売る的中屋）から夢を買い、馬券を汗でクシヤクシヤになるほど握り締めて、自分の入れ込む馬達の走る姿を血眼で見つめる。これこそが競馬の醍醐味だと私は思っていた。

久々に開かれたレースを見に、私は近場の競馬場に来ていた。覗き見る人だからの無くなつたパドックを後にして、久々に満杯になつた場内に戻つた。パドックと言うのは、レース直前の馬達を間近で覗ける最後の面会場であり、熱心に予想する人にとっては、普段見ることの出来ない毛艶や当口の馬の調子など、非常に重要な場面であつた。

「良い馬だ。今日は、あの馬にしよう

地方紙の窓際記者をしている私は、当て馬を決めると馬券を買いついた。もっぱら休日の暇を見つけては、競馬場に駆け込みレースを直向に走る競走馬達を眺めて過ごすのが数少ない趣味の一つだつた。だが滅多に馬券を買つたりはしない。今日は、特別な馬が居たから買った。

私は昔から公営競馬の『賭け事』という形態に興味は無く、レースのために仕立て上げられた競走馬という動物の生き様が好きだつた。数分…早ければ一分を切る勝負のために、数ヶ月に及んで調教され、故障や怪我を覚悟で長いレースを走り抜き、走る事を辞めるその日まで戦い続ける。レースを座巻するサラブレッドの寿命は、長くとも6歳。その六年間の間に、命の優劣が決まってしまう…そ

んな競走馬の強さと優しさに憧れていた。

馬券を上着のポケットにしまった私は、クリーム色の気に入りのハンチング帽を深めにかぶって、予想屋の書いた新聞を読みながら気になる競走馬の評価を見ながら、場内へ帰った。

「ややつ、ミスター万馬券！ 今日はどの馬に賭けるんだあ？ 僕にも教えてくれよお」

「あ。安藤さん」

田の前に馬券を握り締めた男が現れ、私の通り名を呼ぶ。

「賭けてませんよ。今日は」

「またまたー嘘いつちやつて。わざと馬券買つといひ見ちやつたんだから」

私は、嫌な奴に会つたと思つて一度会釈をすると場内に紛れて消えようと思つた。だが安藤は、私の行く先を手で塞ぐ。安藤は知つていたのだ。私が、勝算確立の低い馬を当てるのが得意だということを。

「どれだ？ 1枠のビューティーラン？ 5枠のコロッセオ？」

安藤が、人気の低い馬の名前を順々と並べてゆく。

さつきも言ったように、私は普段は専ら、賭けずに競走馬の走りを眺めるだけだ。だが、これと思った馬があると、どうしても背を押して勝たせたくなる親心のようなものが働き、馬券を買ってしまう。悪い癖だと自分でも思うのだが、不思議これが当たるのだ。

「安藤さん。何したって教えませんよ」

「なああ？お願いだよー。気に入つた馬が居るなら教えてくれよお！」

「ダメですよ。自分の氣に入った馬に賭ければいいじゃないですか」

「今日は負けられねえんだよ！俺っちの娘が結婚するんだ。その嫁入り道具をそろえなきゃならなくてな…うつ」

「一ヶ月前も同じような事聞きましたよ」

「そ、そそそ、そうだっけかなー。まあいいから教えてくれよ先生！」

頭に捻り鉢巻。でーんと出た中年の腹。

ゆるゆるの薄茶色の腹巻が特徴的な安藤は、しつこく私に当て馬はどうだと食い下がる。

この男は、近所の小料理屋の主人で板前としての腕は確かなのだが、賭け事に狂つて妻子を泣かせ、店を傾かせるほどのギャンブル好きだった。競馬は勿論、競輪、競艇、果てはラスベガスのカジノ。ギャンブルと聞けば沸々噴出すマグマの先にも飛び込んでしまうほどギャンブル狂いの男であった。まあ競馬場に閑わらず、ギャンブルをする場には必ず居るタイプの男だと思つてくれればいい。

「絶対に教えませんから。安藤さんも、良い予想屋を探したらどうですか？」

私は安藤に何度質問されようが答える氣は無かつた。

競馬という物をギャンブルでしか考えられない安藤という人物が余り好きではなかつたからだ。聞く耳をもたない安藤と数分口論していると、レースの始まりを告げるファンファーレが場内に響く。

強気になる私は、安藤に言った。

「レース始まりますよ」

「ちいっ、しかたねえなあ！今度また教えてくれよー。」

安藤は、渋々喚声が満ちてゆく場内に消えていった。

私もそれを追うように場内の観客席に戻つていった。

…ちなみに、私の賭けた馬は4枠8番。スタートゲートに入る若き14頭の競走馬達の中で、唯一の古馬と呼ばれる七歳馬。

見事な栗毛の古参中の古参、スタリオンだ。

カシャン！

白塗りのゲートが開く！

どれも調子が整い、毛艶の良いサラブレッド14頭立てのメインレースは、前日の大雨で生憎の重馬場。スタートからゴールまで、距離にして1600mの長い道のりを走る馬群が、水を吸つて重くなる芝生をドンドドと馬蹄を鳴らしながら駆ける。

手綱を緩く握る騎手の体が上下に動くと、場内は溜まりに溜まつた熱気湧き上がる。

寂れた地方の公営競馬場が、今日まで盛り上がつたのは、オグリキヤップ現役以来であるつか…

「やはり重馬場では、足の弱い馬には不利か。スタリオンは…最^レ後尾か^{んがり}」

予想屋の新聞を内ポケットにしまい込むと、自前の双眼鏡を片手に、私は馬群の先頭を覗いていた。円状の芝生の大地に駆ける12頭の馬群から、青いシャドーロール（覆面）を付けた一頭の馬が逃

げるよう前に出るのが見える。

今回のレースの主役。黄枠の2番。配当金1、1倍。

平成以来久々に地方競馬を沸かし、中央競馬から招待試合を申し込まれ帰ってきた、一番人気の鹿毛の5歳馬。逃げ主体の強靭な足を持つサラブレッド『ディープブルー』だ。

オオオオオオオオッ…！

一頭の人気馬が飛び出すと、場内はゴールまでまだ距離があると
いうのに沸く。

流石に中央競馬で『重馬場の貴公子』と呼ばれるほど重馬場に強い
競走馬。悪条件の揃った重馬場を何ともせず、『ディープブルー』は並
み居る地方の若き強豪馬達を抑え、先頭を突っ走つてゆく。

駆けても駆けても、『ディープブルー』に追いつけない。
どの騎手も。どの馬も。

ペースも考えずに鞭を入れ、故障覚悟の勢いで走るが追いつけな
い。

逃げる『ディープブルー』の俊足に対し、馬群は先行ムード一色とな
っていた。

突出して最下位に甘んじるスタリオン以外は、皆『ディープブルー』を
追いかけてゆく。

息を荒げる馬と騎手。雨に濡れた重馬場が、競走馬達の足を引っ張
る。

ワアアアアアアッ…！

だがこれこそが、先行馬『ディープブルー』の得意の環境だった。

一気に突き放して他馬のペースを乱し、自分たちの思い描いたレースの方向を喜ぶ観客の声が場内に一杯になつた。残り200m。この勝負は、やはり一番人気ディープブルー圧勝。
やはり地方馬は中央場に勝てるはずがない。

誰もがそう思つた瞬間だつた。

オオオオオオオオオツ⋮！

だがそこで、観客の誰もが予想しなかつた事が起きた！

一頭の年老いた競走馬が馬群の一番後ろから、スタミナの切れた馬達を搔き分けて、ディープブルーに向かつて猛追跡を始めたのだ！

「スタリオン！」

場内のどよめきより先に、私は馬の名前をあげてしまつた。

ン！

卷之三

追い込みをかけるスタリオンの足は、異常なほど速かつた！

抜く馬に「逃げ逃げ！」と言わんばかりの勇壮さ、最先端スタリオ
ンと最後尾ディープブルーの差、開いた8馬身が古豪の馬が残して
いた強足にグングンつめられる！

場内のどよめきが私の耳に聞こえ始める。

これが本当に、老いた七歳馬の実力なのか！

一生を地方競馬に費しながら、勝つと負けるを繰り返し、もう引退を決め込むほど老齢な古馬が、都會の若い者には負けんと意地を見せるように走る勇姿は、私と観客の胸を高鳴らせた。

「差せ！差せ！」

最終直線150m！

私の興奮は最高潮に達した！

古馬スタリオンは、生粋の追い込み馬。つまり、最後の土壇場でレースをひっくり返す事の出来る強靭な『足』を残す馬だった。私の双眼鏡を持つ手は、いつの間にか震えていた。さっきまでは軽い親心で買ったと思っていた上着のポケットの馬券が、今では面白いほど私の体に重く感じられる。

四馬身…三馬身…二馬身…！

逃げる中央競馬の雄ディープブルー、対、追い込む地方競馬の老骨スタリオン！

白熱のゴール前に、馬券を持つ観客の誰もが眼をやつた。スタリオンの最後の走りにため息交じりの観客たちの声。

怒号は、ゴール直前で次第に大喚声へと変わってゆき…！

ワアアアアアアッ…！

ゴールにほぼ同時にゴールインする一頭の後姿を見ながら、観客たちはクシャクシャになった馬券を握りながら、順位の出る場内中央の電光掲示板を見た。

電光掲示板に勝ち馬の番号が乗る。

一着 8番

二着 2番 ハナ差

場内の観客席は、大荒れのレース順位に思わず怒号を漏らし、握り締めた馬券が春に舞い散る桜の花びらのように宙を舞つた。興奮さめやらぬ私は、古馬を覗きに勝利馬の授賞式に向かつた。おそらく最後であろう、この競走馬の勇姿を目に焼き付けておきたかったからだ。

「オーナーの的場さんに勝利の言葉を……」

伝説的な走りを見せたスタリオンを持つオーナーにマイクを傾ける場内職員。勝利の余韻に浸り、眼を潤ませながら騎手の横に立つオーナーが観客達に放つた言葉は、私の耳に良く聞こえた。

「スタリオンはサラブレッドの中でも人気も獲得賞金も低い駄馬です。今日勝てたのも、おそらく偶然でしょう。損をしたお客様には申し訳ないのですが、名馬の中の駄馬が勝つからこそ競馬というのは面白いのでは無いのでしょうか？誰が信じて、誰が予想しても、このような逆転的な奇跡が頻繁に起きてしまうのです。私は、この奇跡を身近で感じさせてくれたスタリオンにありがとうを言いたい」

中継を見守る私も、オーナーと同じ気持ちだった。オーナーの話を聞いた私は、ポケットにしまった馬券を払い戻すことなく、そのまま競馬場を後にした。この奇跡の思い出を、数十枚

の紙に変えてしまつのは忍びなく思つたからだ。

競馬と云ふのは、實に面白い…

(後書き)

実際、こんな奇跡に出会わせるのは10年で一回くらいの確立です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3228e/>

競馬の面白さ

2010年10月25日01時59分発行